

# 大学院教育学研究科美術教育専修における教育的意義と成果

## —修了生のアンケートによる考察—

福田 隆眞・中野 良寿

The Educational Significance and Effect of Art Education Course in Graduate School of Education,  
Yamaguchi-University

FUKUDA Takamasa, NAKANO Yoshihisa

(Received January 7, 2015)

キーワード：教育研究科、美術教育専修、美術表現実技、美術教育論

## はじめに

山口大学大学院教育学研究科修士課程は平成3年(1991)4月に設置された。美術教育専修は第一陣として同年に開設された。そして平成5年に第一期の修了生を送り出し、以降、20年にわたり修士課程修了生を輩出している。本稿は修士課程美術教育専修の20年の教育的意義とその成果について、修了生のアンケートを基に検証する。

## 1. 美術教育専修の概要と人的変遷

### 1-1 美術教育専修の概要

大学院教育学研究科の設置の趣旨・目的は以下である。「学部における教員養成教育の充実・発展を基盤とし、それとの有機的連携の上で、学校教育の研究と、各教科の教育内容を基礎づける科学・技術・芸術の専門的研究との総合からなる理論的・実践的力量と見識をもち、教育実践の場で教育研究を強力に推進しうる教員の養成を行うことをめざしています。」こうした理念に基づいて、美術教育専修は平成3年4月に、美術教育、絵画、彫刻、デザイン、工芸(陶芸、木工)、美術史の研究分野で構成された。

教育内容は以下の授業科目が開設された。美術教育特論Ⅰ、美術教育特論Ⅱ、美術教育特論演習Ⅰ、美術教育特論演習Ⅱ、絵画特別研究、絵画演習、彫刻特別研究、彫刻演習、デザイン特別研究、デザイン演習、工芸特別研究Ⅰ、工芸特別研究Ⅱ、工芸演習Ⅰ、工芸演習Ⅱ、美術史特論、美術史演習、美術教育実践研究、美術教育支援実践研究、課題研究。

また、研究のまとめとして、修士論文があり、美術教育と美術史を研究対象とするものは論文のみで、制作を対象とするものは論文と作品を課した。修士論文のあり方については、設立当初、教員間での議論を行い、提出要件となっている修士論文に付加して、実技分野を主として研究する場合は作品を課し、修士論文と作品の両方を評価の対象とすることになった。そして「教育学修士」であるため教育に関わる内容を必ず含む論文とすることに決定した。従って、実技分野では教材研究を主とするものが多くなった。また、美術史においては鑑賞教育との関連で論述することにより教育学修士としての論文とした。さらに美術教育を研究するものについては、教育課程、教育内容、美術教育史を主とした。特に現職教員においては、時機にかなっている教育的課題を解決するために、学習指導要領での問題や指導につながる評価の問題などを採りあげることが多くなった。

### 1-2 美術専修の人的構成と変遷

設置当初の担当教官は、教授に、川口政宏(彫刻)、秋山泉(絵画)、吉賀将夫(陶芸)横山省三(木

工)の4名がおり、福田隆眞(美術教育)と景山純夫(美術史)は助教授で〇合となり、設置審での教科教育の教授必置を満たしていた(注1)。そして美術教育の講師として岡田匡史がいた。その後、美術教育岡田匡史の後任として吉田貴富(平成7年着任)、美術史景山純夫の後任として菊屋吉生(平成9年着任)、絵画秋山泉の後任として中野良寿(平成13年着任)、木工横山省三の後任として河野令二(平成17年着任)、彫刻川口政宏の後任として上原一明(平成18年着任)がそれぞれ赴任した。また、デザインは設置審では福田が授業担当であったが、美術教育の論文指導と審査の教官であったため、熊谷武洋と堀家敬嗣が学内措置で授業担当となった。

## 2. 修了生とその意見

### 2-1 美術専修修了生の概要

平成5年3月の第一期の修了生から平成26年3月までに、修了生全体は79名であった。研究対象としての内訳は、美術教育27名(福田担当)、絵画23名(秋山13名、中野10名担当)、彫刻8名(川口担当)、陶芸6名(吉賀担当)、木工3名(横山1名、河野2名担当)、美術史3名(菊屋担当)、デザイン9名(熊谷担当)である。その中で、留学生が8名で7名が美術教育を研究し、1名がデザインを研究した。修了生の多くは、教職に従事し、大学等の研究機関に従事する者も6名いる。また、教育学研究科の修士課程を修了して、山口大学大学院東アジア研究科(博士課程)に進学する学生も3名おり、一人は中国からの留学生で、帰国後、師範大学での研究職に従事している。

### 2-2 美術専修修了生の意見

筆者は修了生79名の内、連絡先の判明している35名に、自由記述のアンケートを実施した。そのうち回答のあったもの25通の全文あるいは一部を以下に掲載する。

・修士課程では大学より専門的・研究的な講義を受けることができた。大学の教職課程で学んだ基礎をもとに課題を調べ自身の考えを論じたり、多様な技法を活用して作品を制作したりでき、研究方法や専門的な技法の経験を積むことができたと考える。

また研究論文を執筆する過程で担当教官から様々な書籍や文献を紹介され学んだことや、海外での作品展、研究会への参加など、大学よりも時間的なゆとりがあるからこそ経験できたことが多々あったと感じている。中学校美術科教諭として教職に就いた今、修士課程で学んできた専門的な知識や経験は授業を立案する上で礎となっている。学んできたことがあるからこそ教えることに意欲と自信が湧く。

また授業の向上・部活動の充実をめざして新しく知識や技法を身につけたいと思っても、日々の職務に追われ、深めることができていないもの実状である。修士課程で様々な材料、技法、美術史などについて学んだ経験は、数年後、必ず教職の充実につながってくると考える。(中学校教員KA)

・大学院で初めて、学びの自由というものを手にした気がする。ここでは受験等の制約から解放されて、自分が主体的に選択した分野について学ぶことができた。また、探究したい分野について、その道のスペシャリストに直接、指導・助言をしてもらうこともできた。(民間会社勤務OT)

・私が、山口大学教育学研究科の2年間で学んだことは、本当にたくさんあります。大学を卒業して約10年小学校の現場で実践に取り組んでいた私は、指導教官の福田隆眞先生に美術教育の理論について、きちんと向かい合う機会をいただきました。加えてありがたかったのは、実技の講義もとらせていただいたことで、その後、小学校で図画工作における制作の意義について、踏み込んで考えながら指導ができるようになったことです。(大学教員SA)

・2年間で実技や理論等、様々なことを学びました。もちろん教育学についても学びましたが、実際に教職について現場にでてみると、一番役に立っているなど実感していることは、専門の美術についての実技や知識だったと思います。(高等学校教員TM)

・作家活動以外に絵画教室を開いておりますが、道具の使い方や助言などは、実際に自分で経験していないとできないことであるため、大学院で専門的に学べたことはとても重要であり、今の活動に生かすことができいております。（作家UM）

・大学での学びを発展させた内容や新しい内容を学べたことで、教育活動に活用できる教材の選択肢を増やすことができたと感じています。また、自身の設定したテーマについて研究及び論文を作成した経験が、現在の仕事に役立っています。（中学校教員YK）

・美術に関する知識や技術はもちろん、課外での活動やそこで出会った人たちとの関わりなども、もしかすると一生ふれることはなかったかもしれない経験をすることができました。（中学校教員MH）

・仕事はパソコンで印刷データを作るだけのように思われるが、実際にはパソコン上だけではなく、様々な場面で絵を描いたり、コラージュしたりと手作業が必要なことが多く、修士課程で絵画、陶芸、彫刻、デザイン等、多分野にわたってより深く学んだことがとても役立ったと思う。（民間会社勤務HN）

・幾度かの教員採用試験の受験の末、合格できたのが修士課程のおかげかは正直分からないのだが、心の拠り所となっていてくれたのは事実である。教壇に立つ今、自信を持って授業に臨めるのも、研究のおかげである。余計な2年間などとは決して思わない。感謝している。（中学校教員KY）

・私は修士課程にて教育学研究科を修了しましたが、今でもあの2年間は大事であったと感じています。造形制作を行う時間が十分にありました。自分が制作をするからこそ美術教育の感性というものについて考えることができたと思っています。そして、一つのことを十分に研究することが後々の教員としての本当の能力に繋がると感じています。現在、私は初等教育、幼児教育の教員養成に携わっていますが、今でも修士課程で学んだ美術教育が根幹となっていることを実感しています。（大学教員NA）

・私が大学院へ進学した理由は、「まだ学生でいられるものならば…」という思い、またそれが許される状況にあったということに尽きる。が、学部で学んだことだけで教育現場に出ることへは、正直まだまだ何も教えられる自信がなく、「もっと制作や、その他の経験をしなければ…」という思いも強くあった。卒業し、めでたく教職へ就いた同期は、他の教科も一種免許を取るほどの学生であったので、「きっと美術よりも他の教科の先生としてやっていくのだろう」と思っていた。院での経験は、時間的余裕があることで、可能な限りの制作や、素材研究に没頭でき、もちろんアイデアを得るための（むしろこちらのほうが時間的に多く割いた）思いつくままの衝動に身を任せる活動、もちろん先生方からの叱咤激励（これからはできる限り逃避していたが）など、創作の言うなれば栄養を取る活動が、自己のその後の自信になったと思う。制作は学部でも行ったが、更に2年制作できたことで多くの素材を扱え、それで得た知識など、現場での教育活動をする上で貴重な経験であり、財産そのものと言える。

大学院までで学べることよりも、教育現場で学んでいくことの方が、量的・質的にも圧倒的に多く高い。しかし、学び方のベース（学生自身の人格形成）には、大学院までの学び方や、制作技術を習得していく課程が大きく影響していると思う。また、自身が院生であった時、後輩の学部生への助言など、教官と学生の中間での役割を求められたことも、教職に就くにあたり有効であったように思う。教員養成は職人養成と共通し、徒弟的なスタイルで行われていると私は思う（私自身が物事の習得を、美術の技法の習得をベースに考えるからであろうが）。美術における制作もまさに徒弟制度で継承されて来たものである。私自身、学部から院と陶芸を中心に、広く美術の各分野を、徒弟的に学べたことが今に繋がっている。院生に期待したいことは、技術の習得を徒弟制度のなかで習得することである。美術に限らず、茶道や華道などの日本文化や、紙漉き、大内塗り、狂言などの地域に伝承する技術を習得することは、将来教職に就かなくとも、様々な職種でも有効なものになると思う。また伝統文化の習得は、美術科以外の教員にも有効なものと思う。（高等学校教員HK）

・私は、学部では彫刻を専攻し、大学院では美術科教育を学んだ。私は現在、島根県にて教職に就き、中学

生に美術を教えている。大学から本格的に美術の勉強を始めた私は、学部で作品制作や美術史学習によって美術について学び、大学院では美術をどう教えるのかという美術教育をより専門的に学んだと思っている。修士論文では、学部時代から大学院まで続けた私自身の作品制作の経験から、彫刻についての素材と技法について整理し、学校教育にどのように導入していくことができるのかを考察した。その経験は、現在中学生に対する教材研究を行う際に、彫刻に限らず絵画や工芸、デザインなどでも、扱う材料や技法について中学生の発達段階も考慮して総合的に考える手がかりとなっている。また加えて、美術についての知識や技能も、大学院でさらに専門的なものを習得することができ、授業の中で生徒に対してよりの確なアドバイスを行うことができるようになったと思う。(中学校教員MJ)

・修士課程では、美術科教育を学び実技では絵画を専攻した。小学校教員養成課程で入学した為、美術科の授業は副専攻で履修しました。講義の数が多くなかなか美術の授業だけに専念することができず、最低限の知識や実技を身につけることが精一杯でした。デザインを専門として、4年次に制作することができたが、1年という短い間ではまだまだ足りないと思い修士課程を希望した。修士課程では、実技、絵画を中心に幅広く、深く学ぶことができた。また、大学外では美術館の学芸員の方々、地元の作家達、ギャラリーの方、他大学の学生や修士の先輩、学校の教員など、美術に携わる様々な方と交流することができた。その中で、自分たちで協賛をとり、展覧会を企画し実現することができ、発表するまでのプロセスを学んだ。また、自分の作品を批評してもらうため、積極的にコンペに参加し、展覧会やギャラリーなどに作品を発表した。大学院の頃知り合った友人を通して、外国へ留学する奨学金制度を知り、3年間中学校、高校と講師をした後スペインへ留学した。スペインの大学では主に版画を専攻し、帰国後自宅に版画工房をつくり制作している。今までの経験を振り返ると、自分自身少しでも経験を積み、好きな専門分野を見つけ、こつこつ制作する中で、美術科教員として自信も少しずつつき、現場でもそれを糧として、指導できるのではないかと思う。小学校、中学校、高校、専門学校、絵画教室などで、指導してきたが、いろいろな年齢層に対して、授業内容を自分なりに工夫していく力がとても必要とされる。この大学院という2年間、試行錯誤していた経験や、自ら情報を収集し、自分なりに工夫して力を身につけるということ学んだと思う。私にとってはとても有意義な大学院でした。(画家NM)

・学部を卒業後すぐに教職につくことにためらいがあった。美術では実技が多く、自分の各分野の技術を高めることが大事だと感じた。修士課程において身近な道具を使った陶芸の教育での活用方法について研究した。その際、学部の頃と比べより深い技術と知識を学ぶことができた。何よりもそれらの内容を、教職で働いていた時に活用する機会もあり、おおいに助かった。美術教育の研究だけでなく、機会があり台湾に短期で陶芸の技法と歴史を学びに行くことができた。そのときに海外から見た日本文化、日本の良いところ悪いところを知ることが出来た。教職で生徒と関わる際にこれらのことはすごく重要であると感じたため、機会がある度にその時感じたことを伝えるようにした。教育について深く学ぶことは大切だが、自分の担当教科を専門的に勉強することは教員にとって更に大切であると思う。なぜなら、教員が教科の魅力を知っていないと生徒にも伝えることができないと思うからである。(留学中IM)

・現場の多岐にわたる業務等から、一定の切り離された状態で勉強できる。自己学習や単なる研修では難しい原点を見つめ直すことができ、教育の流れや学校を客観的に俯瞰できたり、自己の教育を振り返ったりする機会が得られる。論文作成を通してより視野の広がりや思考が深まり、柔軟で多角的に考える習慣なども身につく。教科教育の理念等を改めて見定めようとしたり、培ってきた実際の能力を再統合しようとしたりすることで、現場実践とのズレに気づき、修正した教育活動に繋げていくことができる。効果的な指導助言を仰ぎながら、自己の教育姿勢や教科教育に対する考え方をぶつけられる研究環境と、長期間の時間確保、異国異年齢の学生などとの関わり、幅広い単位修得を通して得られる情報からの刺激など、再教育の学びの場が保障されていることは、現場教員を強く支える体制であり、自信を持っての再スタートに繋がっている。(特別支援学校教員HA)

・私にとって、美術を修士課程で学んだ意義を箇条書きで掲げてみる。1 図工・美術が必修科目としてある意義(他国との比較等をとおして)。2 専門的知識、専門的技術・技能が各段階での指導・評価の基盤

となること。3 小学校・図画工作と中学校・美術の接続の課題について見えたこと。4 「造形あそび」の意義と課題について追究できたこと。5 美術館での実物鑑賞と鑑賞の授業について研究できたこと。6 学会発表等での新たな交流をとおして認識が広がり深まったこと。7 教育を多くの視点で見つめ直すことができたこと。8 修了後についての具体的な目標(めざすべきこと)が見えたこと等。(大学教員SS)

・修士論文に取り組んだ経験は、実際の学校教育現場の教員として美術教育を行いながらも教科指導を考察し、論文執筆し大学院時代の指導教授に指導助言をいただきながら大学の研究紀要に論文発表することにもつながっています。論文発表のために研究した内容は授業内容の改善につながり、学校での授業にフィードバックすることができました。教職実践の内容に関しては勤務校の教員内あるいは教育研究会での実践研修等、学校教育の現場に身を置きつつ研究研修を深めることが可能ですが、山口大学の修士課程でアカデミックな内容の大学院のカリキュラムで学んだことは学校教育の現場ではなかなか学ぶ機会のない内容であり、修士課程に籍をおいたからこそ経験することができた極めて貴重な内容だったと実感しています。(高等学校教頭HT)

・大学院を修了し、教諭として採用されて2年目ですが、求められているのは教科に関する専門性だと感じ、大学院での学びが有用であったと感じています。私自身は、学部4年間のカリキュラムで、各分野の基礎を幅広く学びました。しかし、学部の限られた時間の中ではすべての授業を履修しても「経験」するだけで精一杯、指導するためにはより深い知識が必要だと、大学院への進学を決めました。大学院の2年間では大学の設備を活用し、より高度な技術・技法を学ぶとともに、教科教育の視点を組み合わせた実践的・発展的な内容を研究することができました。高い専門性を身に着けるにはまだ足りないと思うこともありますが、指導へつなげることができています。(中学校教員AM)

・大学卒業後は教職には就かず、結婚・専業主婦となり家庭におりました。40歳になり子どもも手を離れ、憧れていた美術教師の職に挑戦してみたく、夢の一步前進をと大学院に入学しました。大学院修了後は、中学校、看護学院等で非常勤講師として充実した日々を送りました。特に心に残っているのが、12年間の看護学院での授業で、学生と患者さんのための美術を模索したことです。「生涯学習としての美術」をテーマとして大学院で十分に研修させていただいたおかげと感謝しています。(自営業IK)

・私は長期研修の機会を得て、大学院で学ぶことができた。学部の時と同様に各分野ごとに実技や講義の授業が行われ、実技の授業は久しぶりの新鮮な体験であった。また、修論にはかなりの時間と労力を費やしたが、貴重な体験であった。テーマとした日本の表現については、その後の授業にも生かすことができた。つまり、大学院でのまとまった勉強を通して、私は「教えられる」内容を一つ得たのだと思っている。「教えるべき」内容は学習指導要領で示されているが、それを教えるには自分のものとなっている知識・技能がないと難しい。「教えるべき」内容を「教えられる」ためには、「教え方」に精通しているだけでは不十分である。教職生活全体を考えると、大学院の2年間は非常に短い、まとまった時間をとって、広く深く勉強できる期間として貴重である。それはまた、その後の授業の向上や教師の自信などを生む可能性をもつものである。何のために、何を、どのように教えたらいのかという教師の問いに答えを与えてくれるところ、それが大学院であろう。(高等学校教員HM)

・山口大学大学院での2年間は、造形教育を基軸に教育活動に取り組んでいる自分にとって大変意義あるものであったと思います。その中で自分にとって大きな力となっていることが、幅広い視点で美術教育についての研修に取り組むことができたことです。修士論文作成のために様々な文献にあたっていくだけでなく、美術館でのワークショップの企画運営や絵画や陶芸の制作、美術館などの施設を訪れるなどの活動に取り組むことができました。(中学校教員SM)

・私にとっての修士課程は、教科教育の特定の一分野について、あらゆる文献等から歴史を遡って概観したり、その内容を通して、子どもがどんなことを学べるか、考えたりすることに初めて取り組んだ2年間でした。ひとつの分野について、多面的且つ深く追っていく時間を過ごしたのは、本当に得難い経験でした。現

在、教育行政職に携わり3年目となりますが、小学校から高等学校までの授業改善や校内研修の推進等について支援する毎日を送っています。その中では、自分の専門教科以外での授業づくりについて助言する機会が頻繁にあります。当然ながら、その度に新たな勉強の必要に迫られますが、どの教科の授業であっても、同僚の力を借りながら、指導と評価の視点から子どもの学習を支えるより良い手立てを探っていくことができるのは、修士課程の2年間があったからこそだと思っています。（教育行政NM）

・学校教育は、時代の要請と未来の社会を築く人を育ててきたことは言うまでもない。そのような中で、教育者は様々な個性を持った子供たちに対して教育の目的の実現に向け、様々な方法で教育を進めている。その基礎を築くために教員免許を取得できる大学がある。大学はこれまで教科教育を基本とし、教育の目的に関わる内容を学ぶ機関としてその責務を担ってきたと思っている。それは、大学では、教育実習を除き、子どもを直接指導する機会がないためである。この「目的」「内容」「方法」を、大学では「目的」と「内容」、学校現場で「方法」として学んできた感がある。

しかしながら、昨今の教育は、時代の要請に対応するための教育を重視し、「目的」が課題対応のための教育となり、そのために「内容」が生じ、「方法」を講じるようになっていく。具体的には、学力向上や食育、伝統文化を重視した教育をどのようにして行うかという議論や研修が多くなったことがあげられる。これが教育現場の現状である。問題は我々教員が学んできた教育の「目的」や「内容」を正しく認識し、学ぶことが十分できないままに教育が進められているという点にある。基礎や土台のない教育を積み重ねて未来の社会を築くことができるのか甚だ疑問を感じる。

そう考えると、大学教育の意義は非常に大きい。教科教育の基礎を教育の目的と合わせて学び、その目的に応じた内容を学ぶことができるからである。殊に大学院で学ぶ教科教育については、教科の本質に迫る知識と考える力を身につけることができる。そのような力を身につけていけば、時代によって変わりうる「目的」や「内容」を的確につかみ、「方法」へとつなげることができる。私自身が大学で学び、大学院で学んだ知識や技能は、自らが考え、判断し、表現する力となっていると自負している。それと同時に、大学院での学びは教科教育の発展とあるべき理想の姿に向け、今でも基礎や土台となっていることは間違いない。

（中学校教頭AN）

・美術教育の先生たちは美術の知恵及び作品制作を教えてくださいました。例えば、河野先生の授業は時計と箱を作りました。河野先生から先輩たちの作品を参考させ、いろいろなアイデアが浮かんだ。制作期間に苦しみ悩むと、河野先生が優しく根気よく指導してくださいました。故に、作品うまく完成できたとき、嬉しくて楽しかった。福田先生は指導者だけではなく、困っているときに助けてくれ、わたしに大切な先生だと思っている。福田先生から美術教育の基礎知識について勉強していた。特に一年生の授業、山口大学教育学部附属光小学校・中学校の初等教育・中等教育研究発表大会が開催され、院生たちは全員で参加した。研究発表大会を通して、学生なりの満足感を得ることによって、意欲的に表現したり、鑑賞したりする態度を育むこともできると考えていた。その研究発表大会により、論文が深い影響をした。美術は、伝統文化や社会、また私たち一人ひとりのアイデンティティとも深い関係がある。美術活動の研究を通して、発想を促す活動の必要性で、その実践をもとに構成する。テーマに挙げ、イメージを発想し、創造するということは美術教育に大切なことだ。美術活動を通して、他人の作品を受身で取り入れるだけでなく、自分のイメージ、見方、表現を通して伝達することができるように育つと思う。（台湾の大学教員LT）

・台湾で小学校の教員をしていた時に役に立ったのは、大学院での美の鑑賞をしたことです。特に修士論文では、日本の琳派の模様について研究しました。そうした大学院で勉強したことを台湾の小学校の美術教育の授業に運用しました。（元小学校教員CT）

以上は、修士課程の現役学生、留学生、現職教員の修了生の意見を列記したものである。学生は終了後、教職、教育行政、民間企業、自由業に付いている。彼らの意見を概要にすると以下である。

・専門的知識、専門的技術・技能を学ぶことができた。それが学校現場での指導や評価の基盤となっている。  
・学部と教職現場の中間に位置する修士課程に所属することにより、学部時代には深められなかった視点をもつことができ、教職現場においてもそのときの経験や知識が判断の拠り所や自信につながっている。

- ・研究科在学中に海外とのつながりをもつことができ、国際的な視点をもって現在の自分や美術教育を考える事ができた。
- ・現職派遣では一定期間現場での思考とは違う基準に自分をおくことができ、自分自身を見つめ直すことができた。そのことにより、現場へ帰ったときに客観的な考えをもって再出発することができた。
- ・小学校・図画工作と中学校・美術の接続について問題意識をもって取り組むことができた。
- ・学会発表等、学部時代にはない新たな交流をとおして知識や認識が広がった。
- ・論文発表のために研究した内容は授業内容の改善につながり、学校で授業にフィードバックすることも出来た。
- ・アカデミックな内容を大学院のカリキュラムで学べたことは、学校教育の現場ではなかなか学ぶ機会のない内容であり、修士課程に籍をおいたからこそ経験することができた。
- ・教育の「目的」「内容」「方法」を、大学では「目的」と「内容」、学校現場で「方法」として学んできた感がある。大学院では、教科教育の本質に迫る知識と考える力を身につけることができた。

### 3. 韓国、台湾の修士課程の例

東アジア地域の韓国、台湾は歴史的に日本の教育制度を基礎にして改革発展してきた。現在は韓国も台湾も独自の教育制度を整備して、大学院の教育を実施している。以下にその事例を示す。

#### 3-1 韓国の例

韓国の現在の修士課程での一例として、淑明女子大学の授業科目を以下に示す。

教職科目：教育行政及び教育経営、教育方法及び教育工学、教育学概論、サイバー空間と青少年文化、論文作成法、教育研究と統計分析、教育の質的研究方法論、自己調節学習指導、青少年発達と心理、教職実務、教育哲学及び教育史、教育課程、教育評価、教育心理、教育社会、学校現場実習、生活指導及び相談、特殊教育学概論、教師のための現場研究方法。

また、美術教育専攻の授業科目は以下である。

必須科目：美術教育、美術教材研究及び指導法、美術教科理論及び論述。

選択科目：色彩学、絵画論、美術教授法、青少年美術教育、材料と表現方法、造形美学、美術教育とコンピューター、美術教育と学校現場、美術科学習指導研究、美術鑑賞指導法、美術治療教育、美術経営教育、美術映像とメディア教育、美術史と美術教育、美術館博物館教育研究と実際、社会美術教育論、美術実技教育1、美術実技教育2、絵画実技教育と指導1、絵画実技教育と指導2、絵画実技教育と指導3。

この例では、美術教育専攻の授業科目に理論科目が多く、実技科目は指導のために絵画を3コマ、他に2コマ開設されている。これについては、学部の4年間で実技を中心に学習しているので、大学院では理論が主となっているとのことである（注2）。

#### 3-2 台湾の例

台湾の修士課程の美術教育専攻では、日本の教育学研究科との大差はなく、実技科目と美術教育理論、美術理論・美術史から構成されている。台湾ではこの10年間に教育大学が統合・吸収され、単科大学としては、台北教育大学、台湾師範大学をはじめ、数校に縮小された。他は総合大学の美術学部改編されたが、教育大学においても総合大学においても、実技科目が重視されている（注3）。

韓国と台湾の修士課程は異なっている。韓国では美術教育の修士課程での教育が理論系を重視しているのに対して台湾では実技と理論の重視をしている。いずれも教育実践の内容研究も含まれているが、比重としては少ない。

### まとめ

以上は教育学研究科美術教育専修の20年の内容的概略を把握するために、修了生のアンケートを基にしたまとめである。修士課程設置の目的は、教員の質的向上と指導的教員の育成であった。そのために美術教育

専修では、美術表現のための実技、美術史・美術理論、美術教育論を開設している。美術教員の資質の一つには美術表現に対する創造性や技術の習得が必要である。いわゆる教科専門としての実技を重視している。さらに、教育現場での教育観や教育理念を習得するために、教育課程、教育方法の授業を開設している。

例えば、絵画の授業においては学部ではできない根源的な内容として、テンペラのキャンバス作りから行い、新しく技術の習得をしている。また、一つのテーマに時間をかけて探究し思考を深めることも行っている。そのことにより柔軟な思考と創造性が開発されている。また、美術教育の例では、日本の美術教育課程の変遷、成立、内容の講義に加えて、アジア地域の、シンガポール、マレーシア、台湾、韓国などの国と地域の教育課程と教育内容を解説することによって、美術にけるグローバル化と伝統文化の教育を思考する契機としている。

さらに、筆者は2010年に台湾の台北教育大学において、大学院生と学部生による美術展を開催した。目的は、台北教育大学との交流によって学生の美術に対する意識の刷新であった。今なお成長し、変化の途上にあるアジア、特に中国や台湾でのアートシーンでは具象表現と人物表現の作品が多い。そう言った意味で漫画を含めた多様な人物表現の作品を展示することで、台湾の学生にも概ね共感を得た。お互いに交流をすることで、時代性や地域性を超えた共感と差異を感じ取り、国内だけではなく国際的な視点で自らの作品を見る眼を養う端緒となった（注4）。こうした学部の授業では容易に実践できない美術作品による国際交流を実施することにより、大学院生の視野の広がり、価値観の多様性を育成することができた。

修士課程の美術教育専修を修了して、多くは教職に従事している。そのなかから教育行政職に従事する者も出ている。教職以外の民間企業等に就職する修了生もいる。前述のアンケートに見られるように、修了生はいずれの分野においても2年間の修士課程において経験、習得した内容が意義あると回答している。また、近年、留学生が増加している。平成14年に最初の留学生が美術教育に入学した。以来、中国と台湾からの留学生が増加している。ほとんどは美術教育理論の研究を希望している。そして、一部は、博士課程東アジア研究科に進学している。筆者の一人、福田が平成15年から東アジア研究科の兼任教員となって以来、美術教育の留学生が増加した。平成26年度現在、修士課程2学年に留学生が4名、1学年に2名が在籍している。そのうち5名が美術教育論、1名が絵画を研究している。

一方、学部の教員養成課程からの進学者は減少している。その原因は、学部学生の定員の減少、他大学での大学院設置の完了、経済的理由などが推察される。また県の諸事情により、現職派遣学生も美術教育専修では減少している。現職派遣学生の減少は、この20年間に修了の教員が増加し、地域の指導的役割を十分に担っているという見解も推察できる。実際に山口県の美術教育を実践する山口県造形教育研究会での幹事を務める教員が増え、地域の指導的役割を果たしている。

教員の資質の向上は普遍的な課題であると言える。それは常に社会が変化しており、その対応は恒常的に続く。そうした状況において、教育内容の根源的、理念的研究をグローバルな視点から行うことが、教育学研究科での意義であると考えられる。

## 付記

アンケートに御協力いただいた修了生の皆様にお礼申し上げます。

## 注

- 1 有田洋子：「美術教育学の制度的基盤の成立過程 —山口大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要 第47巻（教育科学）』, 2013, p66.
- 2 2014年12月30日の韓国淑明女子大学美術学部金香美准教授とのインタビューによる。
- 3 2014年12月30日の台湾東華大学美術学部林永利教授とのインタビューによる。
- 4 中野良寿、福田隆真他：「国立台北教育大学における山口大学日台交流美術展」 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第31号, 2011.